20230813 レムナント教会 1 部

絶望から希望へ（マルコ 10:46-52）

条件、また、環境、状況に恵まれている人を見ると「あの人は幸せなんだろうなあ」と、ほとんどの人がそのように思います。そして、そうでなければ「不幸なんじゃない？」と思う傾向があります。しかし、クリスチャンの私たちはそのような見方、考え方でよろしいのでしょうか。クリスチャンの私たちはどのような見方を持つのが望ましいのでしょうか。今日の聖書の箇所を通して、それを考えていきたいと思います。

イエス様は十字架で死なれるためにエルサレムに向かっていました。その時に、十字架などは眼中にもないし気にもしないで、とにかくこれからすごい革命が起こるだろう、世界が、世の中がひっくり返されるようなことが起こるだろうという期待で胸を膨らまして大勢の人がイエス様を取り囲んでイエス様に従っていました。ところで、道ばたで物ごいをしていたバルテマイという人が自分の目の前にイエス様が通るという話を聞いて、1 秒も迷わずに大きな声で「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫びました。すると、それを見ていた聞いていた多くの人が「黙れ。うるさい」と止めさせようとしました。「お前のような人が」という意味がそこにはあったでしょう。しかし、どんなに止めさせようとしても、バルテマイは止めることなく、もっと大きな声で「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫びました。そこでイエス様が立ち止まって、「あの人を呼んできなさい」とおっしゃいました。この盲人はイエス様が自分を呼んでいらっしゃるという話を聞いて、少しも迷わずに上着を脱ぎ捨て、その場で立ってイエス様のところに来ました。目が見えないのにどうやって来たのか分かりませんが、そこでイエス様が「あなたは何がほしいの」と聞きました。「見えるようになることです」。イエス様が「あなたの信仰の通りになるよ」と宣言したら、今まで全く見えなかった人が見えるようになり、それからイエス様に従いましたと書いてあります。この聖書の箇所を通して、クリスチャンの私たちはどのような見方を持つべきなのかということを考えないといけません。

1. 完全絶望は真の希望の始まり

その第一が、完全絶望は真の希望の始まりです。今までの見方はそうではありません。完全絶望はもう終わりなのです。しかし、それが真の希望の始まりです。まず絶望的な状況というものがあります。

1）絶望的状況-盲人の物ごい、道ばた

今日の聖書に登場するバルテマイは、目が見えない障害者でした。しかも物ごいをしながら生きて行く、生計を立てるしかない人間でした。しかも物ごいをする場所が道ばたなのです。どう見てもこれは全く絶望的な状況ではないでしょうか。しかし、聖書が語っている真の希望の始まりになる完全絶望は、絶望的な状況だから完全絶望なのではありません。そのような状況の中で絶望的な心境にならないといけないのです。絶望的な状況なのに、いまだにこれは誰かのせいですよと考えていたり、この絶望的な状況をどうにかしようともがいたり、暴れたりしているなら、それはまだ完全絶望ではありません。ある人は絶望的な状況なので、もうこれ以上希望など見込めないから自分で終わりにしようということで命を絶ってしまう場合があります。それは完全絶望ではありません。完全絶望というのは、神様を離れた私たちが自分中心であり、肉が中心であり、この世が中心になって、それを頼りにして希望を持っていたものが完壁に崩れていくことなのです。自殺というのは、今の絶望的な状況の一つの終わり方として自分で考えて選ぶ道なのです。いまだにこうすれば終わるだろうという自分の意志と自分の考えがあって、その結果なのです。それはまだ完全絶望ではありません。完全絶望というのは、その自分自身に絶望することなので、諦めることも諦めないこともできないのです。自分がやることすべてがダメだということが完全絶望です。また、肉体的ないろんな条件などがこうだああだということなどには希望は全くないと、そこに絶望することが絶望なのです。この世にあるもの、それが人の愛情であれば物であれ、理論であれ、どんなものであれ、がっかりした程度の問題ではなくて、もう無になる、無力になるような、そういうことなのです。だから、忘れないでください。自殺というのはまだ完全絶望ではなくて、それは人間のある意味、高慢なのです。死んでしまえば終わるだろうと思うからです。誰がでしょうか。自分がです。そのように思うこ

とすらダメなのです。完全絶望というのは。

2）絶望的心境-3.6.11 の放棄
聖書的に申し上げると、創世記 3 章、6 章、11 章を完全に放棄することです。何かに対して諦めないということもできないし、諦めるよということもできないし、言葉で表現することは難しいのですが、それが絶望の心、心境というものなのです。その時のバルテマイはそのような完全絶望の状況の中でただ物ごいをしているだけなのです。どうするかというのも全くないわけです。

3）イエス様の噂とチャンス
そこにイエス様の噂が聞こえてきました。イエス様が救い主キリストですよという噂が聞こえてきたときに、それが聞こえてくるわけです。それがその通りだというふうに、自分の心の中に聞こえてくるようになる、その心境が完全絶望です。絶望的な状況が絶望ではなくて、たとえ人から見たときにはあの人凄いんだろうなと思われていても完全絶望な心境の人がいるわけです。外見だけを見てはよくわかりません。完全絶望の基準は何かというと、イエス様の噂、キリストの福音のお話を聞くことになり、それに反応を示すことになります。それ以外はすべてが放棄されている状態の中で、一点の光が入ってくるようになる。それに反応を示すような状況。いくら絶望的な状況でも、イエス・キリストのお話を聞いて、それに反応しない人はまだまだ絶望ではありません。だから残念ながら自殺する人は、まだ完全絶望していないから自分の命を絶つわけです。完全絶望の人は自殺もできません。理解できますでしょうか。バルテマイは結果的に見ると完全絶望な状況でした。イエス様の噂を聞いていたのですが、ある日、物ごいをしていたら、自分の目の前をその噂でキリストと聞いていたイエス様が通るわけです。目には見えません。見えない人だから。それで完全絶望の人は、イエス様の噂を聞いてイエス様との出会いのチャンスを見逃すことはありません。そこでバルテマイは大きな声で「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫びます。ただ「イエス様ー」ではありません。噂を聞いていたので、この人もイスラエルの人なので、「ダビデの子、キリストであるイエスさま」という意味なんです。大きな声で叫びました。

4）信仰の妨害皆無
しかし、イエス様を取り囲んでいた群衆は黙れとバルテマイの信仰を邪魔しようとしていました。しかし、お構いなしです。完全絶望の人は、イエス様を信じようとすることにどのような妨害や邪魔があっても構わないのです。邪魔されません。だから信仰に対しての妨害は皆無なのです。これが完全絶望です。また、自分自身にもいろんな弱点や弱さや制限があるのではないでしょうか。見えないし、イエス様が来いと言われても、どの方向でどう行けばいいかわからないのに、そういうこと一切関係なく立ち上がってとにかく向かいました。それがイエス様の反対側なのかどうかわからないのに。理由がないのです。完全絶望の人には信仰を邪魔されるような、妨げられるような理由は一切存在しません。つまり、不信仰の理由などは宇宙に存在しません。それが完全絶望です。イエス様がたとえ話をされた時に、パーティーを開いてお客様は招待しました。ならば喜んで向かうべきなのに、昨日結婚したばかりなので、昨日畑を買ったばかりなので、両親の葬式があるからとさまざまなもっともな理由をもって招待を拒みました。それはまだ完全絶望でないからです。だから希望などありません。招待していたホストの人は怒りを露わにしたという例え話が聖書には紹介されています。つまり、イエス様に向かう信仰に妨害、邪魔になる理由などは一切存在しないということです。でも、いろんな理由があるのです。なぜなのでしょうか。絶望していないからです。絶望が何か分かっていないからです。状況は絶望かもしれませんけれども、心から完全に打ち砕かれていないからなのです。何が言えるのでしょうか。何が考えられるのでしょうか。どのような文句が存在しうるのでしょうか。ありえません。そういう状況の中で一つだけキリストの噂が聞こえてきたときに、そこだけに光が見えるわけです。今まで一度も見たことのない光が。それが完全絶望の心境なのです。それでイエス様は彼に聞きました。「何をしてほしいのか」「見えるようになることです」。

5）信仰告白
これは誤解してはいけません。今まで見えなかったので、とにかく見たいですよという単純な問題解決ではありません。彼にとって今イエス様がキリストだということがわかっているわけです。自分の人生を根本から根こそぎ変えられる方ですよという告白なのです。つまり、見えるようになりたいんですよという

ことは、ダビデの子、イエス様と叫んだ時点からわかるように、「今私に聞いていらっしゃるあなたはキリストですよ」という告白なのです。だから肉体的に自分の問題の中で一番不可能な問題を取り出したわけです。それはただの問題の解決という意味でありません。しかも何をしてほしいのかと言われたときに、迷わずに言いました。なぜなら、あなたはキリストなんだから、躊躇せずに主は生ける神の御子キリストですよと告白するわけです。完全絶望だから。他に考える余地も理由も何もありません。イエス様をキリストと信じます。イエス様を救い主、私の希望として信じて心に受け入れますよ。それに迷いや理由などは一切存在しません。完全絶望だから。そこでイエス様は「あなたの信仰の通りに」目が見えるようになるんだろうという信仰ももちろんあるでしょうけれども、そういう意味ではありません。大勢の人がイエス様が十字架など眼中にもないまま自分の願い、自分の動機のままイエス様に従っているのに、しかも先週も確認したように、弟子たちでさえ十字架の話やその意味が分かっていないのに、この盲人で道ばたで物ごいをし、人に無視され、部外者扱いされていたバルテマイはイエス・キリストですよと告白したわけです。あなたの信仰の通りにと、この人は見えるようになって、一番大切なのはイエス様に従いました。

6）新しい人生
つまり、新しい人生が始まるわけ。ここで私たちは「あー、なるほど。条件に恵まれていれば幸せ。条件があまり良くなければきついな。不幸だな」という考え方は世の中のものであり、単細胞的なものであり、クリスチャンのものではないことを明確にしなければなりません。クリスチャンの見方というのは、完全な絶望こそ真の希望の始まりだという見方です。私たちにどのような絶望的なため息をするしかない諦めてるそういう部分があるのでしょうか。それこそが真の希望の始まり、それこそが本当にイエス様をキリストとして告白するチャンスです。Ⅱコリント５：17。イエス様を信じた者は、どのような絶望的な人生であっても、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなるのです。パウロはこのように告白しています。ガラテヤ２：20、「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」。今までキリストがなかったので絶望というのは当たり前なのですが、本当に完全絶望になるのか、そうでないかの戦いだけであって、そのタイミングだけなのです。「いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」とパウロは言いました。新しく造り変えられて、新しい希望にあふれる人生をスタートすることができるようになりました。バルテマイという人間が。

　もう一度心に刻みましょう。今まで私たちの内側にあったサタンが作り上げたやぐらが砕かれるように、その見方が打ち砕かれるように、完全絶望は真の信仰の始まりです。なぜでしょうか。キリストの福音の噂に耳を貸すことになり、そのイエス様をキリストと告白するようになる時刻表なのです。そして、もう一つ考えないといけないことは、このバルテマイが絶望的な状況にありましたけれども、そこでイエス様の噂を聞いたので、今日のようなことになったわけです。それを聞いたので。それであるタイミング時刻表になって、イエス様ご自身が目の前を通るようになりましたけれども、その前にイエス様の噂を聞いていたわけです。

2. 信者の最高の仕事は、絶望の人生に福音を聞かせること
だから二番目、信者の最高の仕事、最高の職業は、絶望の人生に福音を聞かせることなんだということを心に覚えましょう。

1）残された者(マタイ 5:14、1 ペテロ 2:9、ローマ 10:13-15
だから聖書はクリスチャンの私たちをこのような呼び方をしています。残された者。神様によって残されている者、つまり神様の理由があって残された者です。だから、マタイ５：14には「あなたがたは、世の光」と言われることになりました。なぜなら、絶望の人生に福音を聞かせる神の理由のために、あなたがたは残されている者なのだという意味なのです。Ⅰペテロ２：９にもこう書いてあります。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」と聖書は明言しています。残された者。また、パウロはこのように語っていま

す。ローマ 10：13-15。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。今バルテマイを通して確認しましたよね。「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう」と言っています。「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう」。

2）RT 7 人の本業と副業
旧約の聖書、また新約のパウロを含めレムナント 7 人の本業と副業のことを見分けて考えないといけません。例えば、ヨセフはいろんな苦労を通して最終的にエジプトの総理大臣になりました。ヨセフの本業は総理大臣はありません。ヨセフの本業はこの希望のお知らせ、イエス・キリスト、福音を聞かせることが本業でした。そのために副業として総理大臣が許されました。ダビデもイスラエルの最高の王でした。しかし、王はダビデの本業ではありません。ダビデはイエス・キリストの光の福音を聞かせるという本業をもって、そのための副業として王という副業が許されていました。ダニエルも捕虜の時代に出世したんだなあと思われるように総理大臣になります。しかし、ダニエルにとって総理大臣は本業ではありません。副業なのです。だから、この本業のために神様から許された副業なので、大事にしてそこでサミットにならないといけない。けれども、それに縛られることなどありません。だから、ダビデは明日殺される、この副業の総理大臣がクビになっても、福音を聞かせる本業を守るためにはどうでもいいのです。自由です。分かりますか。今朝も柳先生がおっしゃいましたけれども、そういう意味で競争などありません。クリスチャンには。あくせくということもありません。御座の力によって最善を尽くすということはあるけれども。ここをよく考えないといけません。バルテマイが誰にどういうふうにしてイエス様の噂を聞いたのかわかりませんが、それを聞いてなければ、イエス様が目の前を通ってざわざわしたとしても「何これ？イエス？どういうこと？」で終わったでしょう。噂を先に聞いたので。どれほど大切なことでしょうか。

3）就活の意味
そういう意味でレムナントは特に覚えておきましょう。就活という言葉があります。仕事探しですね。大学卒業する頃になると、あるいは高校を卒業する頃になれば、仕事探しでもう必死なのです。それである人は、それがうまくいかなくて自殺する人もいます。落ち込んだり。同じレベルで就活に当たるというのはクリスチャンの恥です。クリスチャンはもうすでに就職が決まっているのです。神の国という派遣先に就職されていて、そこから各現場に派遣社員として派遣される身なのです、クリスチャンは。就活はなぜするのでしょうか。他の人のように本業を見つけるためではなくて、副業を見つけるために、副業を導かれるためにです。だからずっと前から本業が決まっているので、それをもって副業は何がいいでしょうか。何を望んでいらっしゃるでしょうか。何を備えていらっしゃるでしょうかとずっと問いかけ続けることが祈りなのです。それがレムナントの特権です。余裕を持たないといけません。だから、単に給料の高い低いだけで決めるわけにはいきません。自分の性に合うかどうかも大切な要素でしょうが、それが仕事を決めるすべての基準でもありません。もう本業は決まっているのですから。この感覚がほとんどないわけです。だから高校、大学生など学生の時までは親のおかげで生活の心配なく学校生活を送って、いざ社会に出た時には信仰からほとんど離れているわけです。副業を本業だと勘違いしているから。明日総理大臣をクビになるよと言われても「そうか」。副業がクビになるだけであって、私の本業を誰も奪うことはできないのです。政治家になる人は、国会の中でこの本業をしっかり全うするために。経済、学校、これがクリスチャンなのです。だから信者の最高の職業は宣教師、伝道者なのです。これは職業なのです。給料がありませんけれども。もうすでに天にある霊的すべての祝福、全部いただいて先払いしてもらって、今もずっと注がれているのです。

4）自分の動機や水準からの脱皮
ただなかなかこの本業に気づいて全うすることができない理由が何かというと、今日の聖書に出てくる群衆のように、イエス様に従ってはいるのですが、いまだ自分の動機でいっぱいなのです。「十字架の話は

冗談でしょう。それはさておいて…」という感じなのです。自分の動機でいっぱいいっぱいなのです。それから、自分の水準で物事を見るしかありません。物ごいをしているバルテマイを見たときの自分の水準で黙れ、この野郎と。全部自分の水準です。自分のレベルです。そこを抜け出さないといけません。そこがいつも邪魔なのです。今のメッセージで言いますと、知らないうちに私たちの内側に建てられたサタンのやぐらと言います。そこが砕かれないといけません。それでぜひ残りの生涯、私は本業はもう決まっています。未信者のように就職のためにそんなに悩んだりしないで、むしろ自分の本業を改めてもう一度確かめて、本当にこれが私の本業だと私は信じているのか。バルテマイのように絶望的な人生に、私の内側にいらっしゃる、金銀は私にはない、私にあるものをあなたにあげよう、とこの福音を聞かせるだけなのに、その人の人生が希望の人生に変わる、こういう職業がどこにあるでしょうか。大学教授が大統領が誰ができるのでしょうか。芸術家ができるでしょうか。それを確かめて、それに釘を刺して「神様、自分の欲や自分の何から何まで全部下ろして、このために私のために用意されている副業は何でしょうか」と聞いてみてください。

結論を言いましょう。なのでクリスチャンの私たちは、いろんな状況があるでしょうけれども、単なる励ましや慰めを求めたりしないで、また惑わされることなく、いつもキリストに向かってキリストを見上げましょう。イエス・キリストだけが絶望の人生に希望を与える唯一の鍵なのです。他にはありません。そして、私たちがキリストの御名を呼ぼうとするのに、それに邪魔になるような外部からの内側からのいろいろな邪魔があるかもしれません。そのときにイエスに向かってイエス・キリストの御名を呼ぶことに邪魔になるものは存在しないと断言して、これらは全部悪魔のささやきだと100%断言して退けましょう。キリストの御名を呼ぶこと、邪魔される理由などは一切ございません。それから神様から任された本業を改めて感謝して、信者はこの世をいのちと光として生きるんだという確信と自負を持ちましょう。いのちとして生きるわけだから、皆さんが生きますと主の力をくださいます。光として生きるので暗闇の勢力が去って行くようにもう決まっているわけです。それを確信して自負を持ちましょう。本業に対して。そして、そのために知らず知らず自分の内側にう立てられていた3.6.11のやぐらが砕かれるように祈りましょう。家系代々流れている肉のやぐらが砕かれるように。同じ未信者でも、ものすごくに肉的にこだわりが強い家系があるんです。とにかくよくよく吟味してみてください。自分の家系を。また親の方々を見ながら肉にこだわって、それが壁になっている点を。また、ものすごく律法にこだわって、クリスチャンなのにそれが壁になっている人もいます。あるいは昔の事が心の傷になって、その心の傷という壁をしっかり持って、それでもクリスチャンとして一生懸命信仰生活をしようとするわけです。出来るはずがありません。これが全部崩れるように。大人の方々も同じなのです。もしかして肉の壁、律法の壁、傷の壁というものに阻まれていたんじゃなかろうかと疑いながら、私にはそういうことはいらないから、それが全部崩れてOnlyキリスト、Only神の国、Only聖霊という契約を握って、その中で新しく始めることを決心しましょう。そしてそれを祈ることです。なぜでしょうか。本業を発揮するためです。本業を全うするためです。

（祈り）
恵み深い父なる神様。キリストにあって絶望の人生が希望の人生に変えられることを確認しました。私たちの今までの見方、世にある見方、単なる励まし、慰めの言葉、フレーズなどに惑わされることなく、Onlyキリストになるように改めてひとりひとりを祝福してください。それで目覚めて残りの生涯、自分の本業はもう決まっていて、この世に派遣社員として派遣されている伝道者、宣教師なんだという確信と自負を持って、本業を全うすることができるように、それを邪魔する古きやぐらが砕かれるように。そして、Onlyのやぐらが立つように御座の祝福で豊かに満たされることを祈る信者になるように祝福を与えてください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン